

とにけ君の最初の思い出

大村伸一

デパートのトイレは階がひとつ変わるだけで何もかも違っていているから、新しいデパートに行くのと、全部の階のトイレをまわることにしている。

そのデパートのトイレは清潔でとても気に入ったのだけれど、7階のトイレを最後に確認するまでは最終的な評価は下せないと、僕は心に決めていた。どこのデパートでもおもちゃ売場のある7階のトイレは、たいてい行儀の悪い子供が汚したままになっているものだからだ。

その7階のトイレに入ると先客がいて自分の便器をのぞきこんで驚いた顔をしている。入ってきた僕に何かをいいたそうにしているのだが、そんな振る舞いをする男がまともなはずはない。最近よく見かける何かおかしな人なのだろうと僕は思い、しかしあからさまに無視するのも失礼だし、それでいいがかりをつけられてはかなわないから、さりげなく目をあわせないようにしていたのだけれど、とうとう男のほうから声をかけてきた。

「あなたはオナニーをしたことがありますか」

そんな質問にいったいどう答えたらいいのだろうと僕はしばらく考え込んでしまった。私ほどの年齢の男性が、マスターベーションの経験がないなどと想像できるわけがない。それをことさら質問するというのは、その質問の裏に何か微妙な意図が隠されているのかもしれない。僕は黙ったまま、男の隠された意図について、あれこれと推論を重ね、彼の目をじっと見つめていた。

「ああ。したことがないのですね」

僕は、男が誤解したことに気づいたが、それをどう解けばいいのかまた考えこんでしまう。すると男は誤解したまま納得して、一瞬ためらったあげく、こんなふうにした。

「実は、小便とは違うものが出てくるのです」

そんなばかなことはないと思ったが、そういつのる男にうながされて、仕方なく男の股間を覗いてみると、あたりさわりのないサイズの男の性器から、確かに尿にしてはねばりけの多い、白っぽい液体がどろりどろりと流れ出ていた。

トイレに入ったときからしていた、何かなまぐさい臭いの元はこれだったんだなと僕は悟った。

「それは精液です」

僕は、それが男の求めている答だと思いこんで、思わずそう言ってしまった。だが、考えてみれば男が性的に興奮していないのは、明らかだ。これまでの自分の経験から、欲望を感じることなく大量の精液をたれ流すのは、難しい。いや、不可能だと言ってもいいだろう。

しかも、男は自分の意志とは関係なく、射精し続けているらしい。それを射精と言えるのならだが。

「医者を呼びましょうか」

そう尋ねると、男は心細さと安堵の両方の表情をうかべながら、そうまでする必要はないと思いますと答えた。僕に相談したことで、不安が少し薄れたのだろう。

男が言ったとおり、それから一分もしない間に、流れ出続けていた精液は止まり、男はようやく便器から離れることができた。

小便器の底に溜まった精液はどろりとしているためすぐに流れてはいかず、今にも便器の縁からこぼれだしそうだ。

「もったいないことをしました」

男はその精液が少しずつ流れ去っていく様子をながめながら、僕にそう言った。いったい何がもったいないのですかと聞き返すと、男はこう答えた。

「もったいないですよ。僕はひとつも快感を感じることなく、こんなに大量の精液を放出してしまっただけですよ。普通に射精すれば、10回分くらいはありましたよね。いや、20回分は

あったかな。僕の失われた快感を返してほしいよ」

男は自分の性器をトイレットペーパーできれいにぬぐい、その手で僕に握手を求めてきた。拒もうとしたが、強引に男は僕の手をとり、自己紹介したのだ。

「僕の名前はとにけです」

これが、僕ととにけ君との最初の出会いだった。

彼は僕と同じ大学の学生だった。

そしてそれから僕は、とにけ君と一緒に四年間を過ごしたのだ。